
原稿用紙での告白の仕方

練馬治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原稿用紙での告白の仕方

【Nコード】

N1880H

【作者名】

練馬治

【あらすじ】

文芸部に所属している将平は、文化祭の企画として「片想い」をテーマにした小説を書くことになる。この時、彼は同じ部活の史織に恋心を抱いており――。

「ダメだ。あーもう、全然進まない……」

ため息と一緒に将平はペンを投げ捨てて、原稿用紙の上に突っ伏した。紙の匂いがする。その独特な匂いを嗅いでいるうちに、横から史織の声が聞こえてきた。

「落ち込まないでよ、将平くん。今、どこまで原稿が進んでいるの？」

将平は顔を横に向けて、奥の机で作業をしている史織に視線を合わせた。

「5枚です、先輩」

「……なんだか序盤からつまずいているようだけど、どうして進まないの？」

「次の展開が思いつかないからです」

「あ、あのね——」

史織は呆れて、右手のペンを止めた。

「そうなるんだったら、先に物語のプロットを作っておかなきゃダメでしょ」

「アハハ。そうですね」

二人だけの部室に、将平の空笑いだけが虚しく響く。

部室の隅にある窓からは、冷たい風がビュビュウと吹き込んでくる。季節はすでに秋。外はすっかり暗くなっており、さっきまでグラウンドで練習をしていた運動部の人もすでに撤収を済ませているようだった。

時計を見ると、最終下校時間まで残り十分ほどしかない。

結局、将平がこの部活中に原稿を進められた枚数は、たったの二枚だった。

顔を上げた将平は、自分の原稿タイトルに目を落とす。それを眺めていくうちに、将平は自分の中で悔しい気持ちが込み上がってくるのを感じた。

二週間後には、高校の文化祭が控えている。文芸部に所属している将平にとって、一年で最大のイベントだった。

今回の文化祭で、文芸部はオリジナルの冊子を発行する予定だった。ジャンルは自由。ただし、一つのテーマに絞って書かなくてはならない。つまり、将平は二週間以内に一本の小説を仕上げなければいけないのだ。

だが、問題なのはその量だった。

「原稿用紙百枚以上は、さすがに無茶ですよ」

白紙の原稿をパラパラめくりながら、将平は愚痴を漏らす。

「プロの作家はともかく、ただの素人が百枚の原稿を二週間以内で書けるわけありませんよ。せめて三十枚くらいに減らすことはできないんでしょうか？」

「こればかりは無理だね。文芸部の人数がもっと多ければ減らすこともできるけど、二人しかない状況だね。私だったら二週間で将平くんの代わりの分も書き上げられるけど、それじゃ部活として出す意味がなくなっちゃうしね」

「そりゃ、そうですね」

少し間を置いてから、史織は将平に強く言った。

「下手でもいいから、思い切って書くことも大切よ。書き終わった分は私も推敲してあげるから、将平くんもしっかり頑張ってちょうだいよ」

「……はい、先輩」

将平はうなずきながらも、史織から目を逸らす。これ以上、真剣な史織と顔を合わせていたら、間違いなく頬を赤くしてしまいそうだったからだ。

史織は二年生でありながら、文芸部の部長を務めている。顔の造

形は悪くはないのだが、分厚い眼鏡と、自分から表舞台に立つことを好まない性格によって——どちらかといえば地味な印象を醸し出している先輩だった。

……なるべく早いうちに、ケリをつけておきたいな。

そう思いながら将平は大きく深呼吸をして、壁に貼られている一枚のカレンダーに目を留める。そして、これまでの半年間を頭に思い浮かべてみた。

半年前。

将平が史織に出会ったのは、今年の四月だった。

中学校時代から、それなりに本を読むことが好きだった将平は、高校に入学した直後から文芸部に興味を持っていた。しかし、当時の部の現状を知って、当初は将平も入部するかどうかわずいぶんと迷ってしまった。

なぜなら、人数が少なすぎたのだ。

その当時の文芸部は、事実上、二年生の史織だけしか活動していなかった。

厳密には、学校の名簿には五人の文芸部員が登録されてある。しかし、ちゃんと部活に参加しているのは史織ただ一人。しかも残りの四人は、史織が友人たちに『一回も部活に來なくていいから』という条件付きで入部届けを書かせた——いわゆる公認の幽霊部員のな者たちで、史織以外の人部室にやってくる可能性は微塵もなかった。おまけに顧問もやる気がない人物なので、部室に來ることは滅多にない。

しかし、結局、将平は文芸部に入ることに決めた。

仮入部の時に史織と会話をする機会があり、将平自身も驚いてしまっくらい二人で話が盛り上がってしまったのだ。一つ上で——しかも異性の先輩とはいえ、同じ趣味を持っていれば自然と馬が合ってしまうのか。おまけに二人とも『恋愛小説』が好きな小説のジャンルだったので、それに関しては特に盛り上がった。

こうして文芸部は部長を史織、副部長を将平にしての体勢が始ま

った。

結局、今年の文芸部に入ってきた一年生は将平だけだった。毎週火曜日と木曜日に使われる文芸部の部室は、基本的に二人の雑談場として使われることになった。

そして、季節は秋――。

文化祭も近いので、最近は毎日部活が行われるようになっていた。将平にとって史織と会える回数が多くなるのは素直に嬉しいことだったが、目の前の積み重ねられた原稿用紙を見ると、どうしても陰鬱な気分になってしまふのだった。

百枚という数は、大きい。

おまけに枚数以外にも筆が進まない理由が、他にも将平にはあった。

「ねえ、将平くん。今回はどんな小説を書くつもりなの？」

ちょうどその時、自分の原稿を手に持った史織が将平の机までやって来て、背後から彼の原稿を覗いてきた。あまりの突然の接近に、将平はビクツと体を跳ねらせた。

「うわあっ！　び、びっくりさせないでくださいよ！」

「そんなに驚かなくてもねえ……。で、どんな小説を書くつもりなの？」

将平は、なるべく平静を装いながら答えた。

「か、『片想い』をテーマにした小説です」

「あら、それは将平くんが春の文芸コンクールにも書いた小説のテーマじゃない。もしかして将平くん。春の大会のリベンジをするために、また書こうと思っているの？」

「はい」

将平の返事に、史織は急にうつとりとした表情になった。

「あー。そっかー。やっぱりいいわよねー。片想いの恋愛小説って。将平くんのリベンジしたくなる気持ちもよく分かるよ」

恋愛をテーマにした小説を将平がまた書くことに、史織はかなり嬉しそうだった。

将平が小説を書くのは、これで二回目だった。

彼が初めて小説を書いたのは、今から四ヶ月前。文芸部が活動していることを学校に示すため、地域で開かれた小説コンクールに参加することになったのだ。

史織は将平の原稿を読みながら、苦笑する。

「リベンジだと、筆が止まるのも納得できるわね。この前の将平くんの小説で、私もいろいろ指摘しちゃったから、いざ書こうとしたら筆が重たくなっちゃったのね」

「ホントにバレバレですね……」

将平も史織と同じように苦笑する。

中学生の頃から本を読んでいても、書くこととなると話も違ってくる。四ヶ月前に史織からの猛烈な指摘を受けた時は、戸惑いの連続だったことを覚えている。

「この前の小説の反省は覚えているよね？ 『片想い』がテーマだから、主人公の心理描写が多くなるのは当然けど、将平くんの場合はその心理描写が多くなりすぎて、ストーリーのテンポがあまりにグダグダになってしまったのよね」

ここまで言われると、さすがの将平も恥ずかしくなってくる。

「お願いですから、蒸し返さないでくださいよ！」

「何言っているの。読んでくれた人の感想や批評は、百パーセントとは言わないけどきっちり耳に留めておくべきよ。まっ。将平くんの小説は心理描写が多すぎた反面、読んでいるこっちまで伝わってくるほどのリアリティがあったから、その分は良かったとも付け加えておくけどね。その長所を大切にしていったら、将平くんも将来、絶対にいい作品が書けると思っわ」

実力のある史織からの指摘だったので、将平もただ頷くしかなかった。

史織は小説家を志望している。

中学校の頃から小説を書き始めたので、まだ十七歳ながらも文章力は充分に備わっており、四ヶ月前の小説コンクールでは最優秀賞

に輝いてしまった。

公募にも積極的であり、将平が聞いた話によると、最近の応募した文芸の新人賞では三次選考まで上り詰めたらしい。自分に関わることをあまり言わない性格のため、細かい所までは将平も確認できなかったが――あと数年頑張っていけば、『中村史織』という名前が本の作者名に出るのも夢じゃなさそうな気がした。

史織は質問を続ける。

「それで将平くんは、今回はどんな設定で書こうとしているの？」
「どういうことですか？」

「片思いがテーマだったら、ある程度の物語の設定とかは考えてあるでしょ？」

「ああ、そういうことですか」

将平は口をもごもごさせながら、答えた。

「テニス部にいる主人公が、同じ部活のヒロインの女子に片思いをしている小説を書こうかなと考えています。……今、頭の中にある設定を言いますと、主人公はヒロインにアピールしようと頑張っているんですけど、そのヒロインは三度の飯よりもテニスが大好きなテニス馬鹿で、どうしても主人公に目を向けてくれないんです」

「へえーっ。何だか古臭い感じもするけど、しっかり考えてあるじゃないの」

「あくまで『設定』の話ですよ。どうやってヒロインが主人公に目を向けてくれるのかも、まだ考え中ですし……」

「そうになると、ラストは二人を結ばせる気なのね。それも悪くないのかもしれないけど、個人的には結ばせないラストでも物語の味として面白い気がするんだけどね。荒削りだけど、将平くんの心理描写は悪くないし」

「それはダメです！ 二人を結ばせるラストは、絶対にするつもりですから！」

将平の強い口調に、史織は面を食らったような表情になる。

最後の結末だけは史織に何を言われようとも、将平は変えないつ

もりでいた。

「そつか。そこに将平くんのこだわりがあるなら、私はそれでも構わないけどね」

「じゃあ、今度はこっちから訊きますけど、先輩の方はどんなテーマに設定したんですか？　俺が見た感じですよ、結構、調子良く書いているようでしたけど」

その問いに、なぜか史織は嬉しそうに微笑んだ。

「まだ内緒。私の小説テーマは読むまでのお楽しみね」

「えー。そりやないですよ」

「個人的に手応えはバッチリだから、それまで期待していてちょうだいよ」

史織は原稿用紙の束を裏返しにして、将平の机の上に戻す。さすが、自分に関わることはあまり言わない性格である。

時計に目を向けてみると、すでに最終下校時刻から十五分も過ぎていた。

「先輩。そろそろ片付けを始めたほうが——」

「あつ……そうだね。早く帰らないと、また先生に怒られちゃうし」
史織は慌てたように、原稿用紙を鞆に入れる。

普段の文芸部は史織と将平が一緒に本を読んだり雑談をしたりするのが日課なので、たまに時間を忘れて、警備で見回っていた先生に注意されることもしばしばだった。

「将平くん。早くして！」

「分かっていますよ」

将平も急いで原稿用紙を鞆にしまい、机の隅に置いてあつたカギをポケットに入れる。副部長の仕事は部室の戸締まりをする他にも、カギを職員室に届けるなど、意外と雑用的な仕事も多い。

それらを適当に済ませながら、将平は今回の小説テーマを頭に思い浮かべた。

『片想い』

四ヶ月前の小説も同じテーマで書いて、心理描写が多すぎる反面、

内容にリアリティがあつて良かったという指摘を受けてしまった。

ある意味、それは将平にとって必然のことであつた。

将平は本当に——史織の事が好きだったのだ。しかし、将平はその気持ちをどうしても直接伝えることができず、いたずらに時間だけを費やしてしまった。

……なるべく早いうちに、ケリをつけておきたいな。

さすがの将平も、このままではダメだと思つた。間接的に史織への想いを小説で表現していても、肝心の彼女が気付いてくれなければどうしようもない。それに、このままごく普通の先輩後輩の関係を続けていく自信は、今の将平にはなかった。

今、将平が考えている告白の計画はこうだ。

部活が終わつた後も、基本的に将平と史織は一緒に帰っている。とはいえ、最寄りの駅で二人とも違う電車に乗るので、勝負は高校から駅までの帰り道である。その時に適当なタイミングを見計らつて、今回の『片想い』小説は史織に向けたものであると告白する。それに驚く史織に向けて、自分の想いをありのままに伝えるのだ。当たつて碎ける——である。

ようやく部室の片付けを済ませた史織が、将平の方を振り向いた。
「じゃあ、将平くん。早くカギを職員室に返しに行きましょう」

「……はい」

先に部室を出ていく史織の後ろ姿を眺めながら、将平は心の中で覚悟を決めた。

しかし、できなかった。

なかなか告白のタイミングが掴めず、結局——他愛もない雑談だけで駅に着いてしまった。そしていつものように駅で史織と別れて、いつものように帰宅している最中である。だが、足取りはいつもと違つて何倍も重たかつた。

あまりの情けなさに、将平は何度も自分を責めた。こんな感じで

史織に告白できずじまいになったのは、なにも今日が初めてではない。何回も続いていることだから、なおさら自分の度胸のなさに将平は失望してしまうのだった。しかも、それに追い打ちをかけるかのように、別れ際――史織は将平に課題を出してきたのだ。

時間は一時間前に遡る。

『将平くん。明日の部活までに原稿用紙を十五枚分、絶対に進めておいてね』

『ええつ。明日までですか？』

『そうしなくっちゃ、二週間後に間に合わないでしょ』

『でも、今夜中に十五枚分って無茶ですよ！』

『そこは将平くんの頑張り所よ。明日は水曜日で本当だったら部活はないんだけど、私が先生に言って許可もらっておくから、明日は絶対に部室にやってきてね』

『……はい。分かりました』

がつくりと頭を落とす将平に、史織は励ますように将平の肩を叩いた。

『少しコツを言っておくとね。モチベーションが全然ない時でも、原稿用紙を手元に持っておくことが大切よ。そうすれば、次第と書きたい気分になってくるから』

そう言い残して、史織は駅のホームへと消えていった。そして現在に至る。

「はあ……。嫌だな」

大きな倦怠感を抱いたまま、ようやく将平は家に到着した。

部屋に入って早々、鞆を机に放り投げて体からベッドに横たわる。夕食はまだ摂ってないが、食べたい気分ではなかった。

やはり、現実はその簡単にうまくはいかない。ドラマのように現実が理想としている方向に動いてくれたら、どんなに楽しいことか――将平は頭の中で何度も考えた。

将平が書こうとしている、『片想い』の小説もそうだった。

主人公はヒロインに熱烈なアプローチをかけるが、実はラストで

ヒロインも主人公のことが好きだったという事実が判明して、二人は結ばれるという理想的な結末。だが、結末はどうであれ、物語の主人公もヒロインのためにすっかりアプローチをしている。

実際の世界でもそうである。

自分で動かない限り、事態は何も発展しない。

将平はベッドから起き上がって、大きく深呼吸をする。

「文化祭までには、何が何でも言わなくっちゃな」

——とりあえず、悲観的に考えることだけはやめよう。

そう心に決めて、今度は自分の頬を思いっきり叩いた。

そして、史織の顔を思い浮かべる。

将平が史織のことを意識し始めたのは、入部して一ヶ月くらい経った時だった。それ以前は『馬の合う先輩』という認識が強かったが、徐々に交流を深めていくうちに、いつの間にか彼女の姿を脳裏から剥がせなくなってしまうていたのだ。

恋愛をしたことのない将平にとって、これが初めて感じる女性への『好意』だった。

半年前に将平が書いた『片想い』の小説も、まさにその気持ちの表れであった。

もしかしたら自分の気持ちに気付いてくれるかも——と、馬鹿げた期待を抱きながら『片想い』をテーマにした小説を書いたが、当然のことながら史織は気付くことすらなかった。さすがの将平も、あれは「恋愛小説の読み過ぎだろ」と自分の中で後悔した。

だが、今回も自分は『片想い』の小説を書くこうとしている。

いつまで経っても進歩できない自分に呆れながらも、将平は机に放り投げた鞆に顔を向ける。その中には、ほとんど白紙の原稿用紙が入っているはずだ。

——モチベーションが全然ない時でも、原稿用紙は手元に持つておくことが大切よ。

先ほどの史織の言葉が思い出される。

すでに『片想い』をテーマにした小説を書くと、史織に公言して

しまった。今さらテーマを変えるつもりでもないし、史織にも課題を言い渡されているので、出来るかぎり早めに書き始めたほうがいいかと、将平も判断した。

最低でも十五枚を目標に定めて、鞆から原稿用紙を取り出す。ところが、それを確認した瞬間、将平は信じられないことに気付いた。

将平が家に持って帰ってきたのは、史織の書いた原稿用紙だったのだ。

「そんなバカな……」

あり得ないことに、将平は啞然とする。

反射的に将平はズボンのポケットから携帯を取り出して、史織の番号をプッシュする。だが、何度も掛けても一向に出てこない。どうやら史織は今、電波の届かない場所にいるようだった。しかも、あつちから連絡が来ていないということは、まだ史織は間違えに気付いていないことになる。

「本当に今日は厄日だな……こりゃ」

頭を掻きながら、将平はどうしてこんなことになったのか頭を巡らせてみた。

史織の原稿用紙がここにあるということは、自分は間違えて彼女の原稿用紙を鞆に入れてしまったことになる。あの時は急いでいたので、細かい確認をしないで用紙を入れたのは事実だ。だが、それでも自分の机に置いてあった用紙を鞆に入れたことは将平も覚えていた。史織の机は、将平の机から離れた位置にある。間違っても、彼女の用紙を鞆に入れることなどあり得ない。

なのに――。

それなのに彼女の原稿用紙が今、将平の目の前にあるのだ。何気なくそのタイトル欄を見ると、『片想いの告白の仕方』というのが書かれてある。

「……えっ？」

そのタイトルを確認して、将平は一瞬だけ自分の目を疑った。

なんと、史織も将平と同じ『片想い』をテーマにして小説を執筆しているようだった。部活中で史織はこの事実を全く言っていなかった。素直に将平は驚いてしまった。そうになると、自然と本文の方にも目が移ってしまう。

そして、その冒頭を読み始めて、将平は今度こそ自分の目を疑った。

相変わらずプロを彷彿させるような、流れるように読みやすい文体だったが、注目すべきは文章ではなく、その物語の内容にあった。史織の書いた小説の主人公は、『中村詩織』という文芸部に所属する高校二年の女子だった。そして、この小説のもう一人の登場人物が『昇平』という、同じ文芸部に所属する『詩織』とは一つ後輩の男子だった。

心臓の鼓動がどんどん速くなっていく。

『中村詩織』とは、明らかに将平の実際の想い人である『中村史織』の名前だった。

こうなると、続きを読まないわけにはいかなかった。

パラパラと原稿をめくってみれば、史織の小説はラストの直前まで書かれてあった。まだ草稿段階なので文章は安定しない箇所はあるものの、読めないほどではない。

将平は一字一句見逃さないように、史織の小説に目を通した。ストーリーの流れは主にこうだった。

主人公の『詩織』は、同じ文芸部の後輩である『昇平』という男子が好きだったが、鈍感な彼はその気持ちに気付いてくれない。かといって直接、口で告げるのも何だか恥ずかしかった。そこで『詩織』は文芸部らしい、一つの作戦を思いついた。それは自分が『昇平』のことが好きであると分かるような小説を書いて、その原稿用紙を『昇平』の鞆にこっそり入れることだった。物語は、読んでくれる『昇平』にも伝えやすいように、いろいろと工夫をした。そして、見事に作戦の成功した『詩織』は翌日、彼の返事を待ったため、

いつもの部室で待ちかまえて――。

そこで文章は途切れていた。

最後まで読み切った将平は、しばらくの間、呆然とその原稿用紙を見つめた。

小説に出てくる『詩織』は、将平がこれまでにやってきた行動を再現するかのように書かれてあったのだ。一部、現実と異なっている所はあるものの、核心的な部分はほとんど一致している。

将平はゆっくりと原稿を机に置く。掌は汗でベトベトだった。

物語に出てくる『詩織』が好意を持っている『昇平』とは、一体誰のことを指しているのか――。それは目に見えて明らかだった。

その時、まるでタイミングを見計らったように携帯が鳴った。通話ボタンを押す。

『ああ、将平くん……。夜遅くにごめんね』

出てきたのは、やけにそわそわした雰囲気 of 史織の声だった。

『あの……。私の原稿は、もう読んでくれたかな?』

『先輩』

『うん?』

『あなた、恋愛小説の読み過ぎですよ』

史織はブツと小さく吹いた。

『その言葉。そっくりそのまま将平くんに返してあげるわ』

あっさりと、いつもの口調の史織に戻った。

将平も小さく笑って、史織に訊いた。

『四ヶ月前に書いた俺の小説の意図は、最初から分かっていたんですか?』

『ううん。気付いたのは、つい最近だね』

『じゃあ、この原稿用紙はいつの間にすり替えたんですか?』

『部活が終わる直前に一度、将平くんの所にやってきたじゃない。その時よ』

『……ああ、あの時ですか』

ここでようやく、将平は理解した。

今日の帰る直前——史織は一度だけ、例の原稿を持ったまま将平のところ近づいてきた。おそらくその隙を見計らって、将平の原稿をすり替えたのだらう。

あまりに大胆なやり方に、将平は苦笑いをするしかなかった。

その後の二人の会話は、今日まで言えなかった自分の気持ちを伝える内容になった。将平の方は不思議と緊張することなく、今までの気持ちを伝えることができた。

史織が彼のことを意識し始めたのは、二学期が始まった頃だった。今回の計画を練ったのも、将平が書いた小説の意図に気付いたのがきっかけだったらしい。その話を聞いて、将平は笑わずにいられなかった。まさか、あの史織が将平と同じ方法で気持ちを伝えてくるとは夢にも思わなかったからだ。

それから三十分くらい話して、最後にけじめを付けるために将平は言った。

「あの、先輩」

「うん？」

「好きです。付き合ってください」

『ええ、喜んで。これからもよろしくね』

何ヶ月も言えなかった言葉にしては、あっさりした終わり方だった。

お休みの挨拶を交わして、ようやく将平は電話を切った。

大きく息を吐いて、イスの背もたれに寄りかかる。改めて自分を見てみれば、まだ制服姿のままだった。予想外の事態の連続に未だに信じられない自分がいたが、史織の告白の返事は確かに将平の頭の中に残っていた。

ふと、将平は机に置いてある原稿用紙に目を落とす。

そして用紙を丁寧にめくり始め、文章の途切れたページで手を止める。

告白を行った以降のストーリーは、残念ながらまだ書かれていな

い。物語の中で自分の想いを伝えた『詩織』が、いつまでも部室で『昇平』の返事を待ち続けているのだ。

それに、自分は答えてやらねばならない。

現実の世界では、すでに『片想い』の物語は終わっているのだ。

筆箱から鉛筆を取り出して、将平は史織に怒られる覚悟でその続きを書き始めた。

（後書き）

最初は「ちよつと捻った短編を目指そう」と思って書き始めましたが、書き終わった後「ちよつと糖分が多くなってしまった……」と思いました。個人的な主観ではありますが（汗）

まだまだ課題の残る作品ですが、最後まで読んでいただきありがとうございました。感想やアドバイス等は、謹んで返信させていただきます。

【執筆完了】 2009年 5月12日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1880h/>

原稿用紙での告白の仕方

2010年10月8日15時10分発行